

原発被災者（複合被災者）支援から見てきた心理の一考察

蘭 香代子*

Psychological State and Degree of Support Given to March 11th Earthquake Evacuees

Kayoko ARARAGI*

Abstract

On March 11th 2011, in eastern Japan a great earthquake occurred, followed by the first nuclear power accident, which happened at a plant on Fukushima.

The present study discusses mainly psychological factors of people and the degree of support given to them.

Within this study the process of the psychological development of the evacuees after four months can roughly be divided into four sections : ① the obedient and calm shelter panic period ; ② stability periods ; ③ the conflict period ; and ④ primary period.

With regards to Support given to the evacuees, this too has been divided into four areas for discussion ; ① safety and life support ; ② material support ; ③ psychological support and the support in the form of food, clothing, and housing and mainly psychological support ; and lastly support to ④ encourage independence.

〔問題〕

2011年3月11日午後2時46分、東日本の主に太平洋側一帯（主に岩手から千葉県にまたがる広範な範囲）を襲った地震は、マグニチュード9.0という巨大地震であった。さらにマグニチュード7級の余震が相次ぎ、太平洋側の海岸沿い一帯を10メートルを超す巨大津波が襲った。そして福島県浜通一帯（双葉郡地区を中心に）は福島第一発電所の事故という未曾有の惨事に見舞われ、地震、津波、原発という三種の複合震災に見舞われた。地震や津波で生命の危機に直面し、かろうじて生命を得たものの、多くの

地域や知人や親類を津波で亡くし、その真新しい記憶が現前としているさなかに、原発事故に遭遇することになったのである。さらに放射能汚染に覆われた双葉郡地区は「立ち入り禁止区」になり、地震直後から着のみ着のままで避難した住民は、原発事故の収束がつかないなかで、転々と避難先を変える避難生活（原発難民）の途上（7月現在）にある（県外35000人、県内45000人、計80000人。NHK クローズアップ現代報道）。

彼らの未曾有の体験は、驚き、戸惑い、落胆、怒り、憔悴、不安、あきらめ、と様々な心情を

*人文学部 人間関係学科

呈しながらも、淡々と沈着に行動せざるを得ない失望と無気力のなかにあった。自らの力で生命の維持と安全の維持をしていくという基本的欲求を喪失した彼らにとって、生き残った地獄は一日千秋の思いで安住地を持たない辛辣な心身状況へとつながっている。「何もかも失ってしまった」「これまでの人生も、これからの人生さえ喪失してしまった」「生きながらえている地獄」「他のひとにはわかってもらえない苦痛」という悲泣のまっただなかで、深すぎる心の傷に緘黙にさえなっていた。それでも気をふりしぼって、「夢の中をずっと生きながらえている」、「外国をずっと流浪している」「今後の展望が見えない難民」「生きる屍」と表現している彼らの心身の実態は、かなりの主体感覚を失い、被動感、受動感が主となり、適応機制が「抑圧」や「逃避」、「白日夢」「合理化」という心理的問題を含んだ防衛に満たされている。しかしマスコミの報道からは断片としてしか浮かび上がってこない。かろうじて彼らが自分を支えている心は「この天災や原発事故は自分に責任はない」、「この震災で家や家族を亡くしたひとがたくさんいる」「自分には家も土地も残っている」という「まだ、ましである」という傍観的比較心理と、「国や東電が保障してくれるのではないか」という依存心、の心理でさえある。

いずれにしてもこれらの複合震災に前向きに向き合える状態にはなれず、保護や庇護、支援がなければ心身を持ちこたえられない精神的に大きな深すぎる傷を伴った退行現象のさなかにあったが、四ヶ月という経過のなかで仮とはいえ、自分の居場所が定まり、生活のめども折れ合い始め、ころころにつばりが芽生え主動感が蘇ってき始めている。ここでは震災直後からこの四ヶ月へと、支援も加味して変化していった心理の考察を試みるものである。

ところで大震災に関する心理のケアに関する研究は、阪神・淡路大震災において、いくつか報告されている。林（1996）は、大震災とこのケアでは、無力感や喪失体験からくる被災者の心的外傷後ストレス障害をいかに防ぐかが課題であるとしている。そして林（1996）は、①死や負傷の危険、あるいは屈辱的な状況への遭遇、②恐怖心や無力感を感じる体験から、「なすすべがなかった」という無力感が、心的外傷体験につながっていく視点や、かけがえのないものの喪失感がストレス刺激になること、さらに余儀なくされた生活の変化などが影響することを指摘している。

井原（2000）は、地震による心理的な影響について、S-HTP法からアプローチしており、①統合性がない、②人物の省略化、③人物の動き（運動）がない、④木の樹幹の空白、⑤枝描写がない、などを知見し、被災体験のある子どもは感情的側面の空洞化や無力感、エネルギーの少なさなどが特徴であると報告している。

さらに森・白川・鈴木ら（2000）は、阪神淡路大震災の被災後の子どもに描画グループワークを試みた結果、①怪獣、炎、爆発などの人力を超えた破壊的表現、から、②競争・戦い場面、③統合された安定したイメージへと、変化していったことを報告した。この変化へのかかわりは、攻撃性を受け入れ包み込む面接者の態度が、肯定的な方向に変化していったことを知見している。

そして、井上・片山ら（1998）は、阪神・淡路大震災の避難所でのこどもの集団遊戯療法において、Ⅰ期：混乱に満ちた時期（3月）、Ⅱ期：攻撃性にあふれた時期（4月）、Ⅲ期落ち着きを取り戻し再生に向かった時期（5月6月）の時期を考察している。衣食住と共にこころの安定への取り戻しを課題として支援している。

また刈屋（2006a）は、中越地震での中学生（34

名)に及ぼしたS-HTP法の描画からは、①意欲やエネルギーの低下、②不安定感、③家の加工などの強化付け、などを知見している。また刈屋(2006b)はインタビューからのシーケンス分析を試み、①「何もなくなった」ことの喪失感と衝撃と、②「他の人にはわからない」孤立感、③「助けられて生きている」お世話になっています感、④「地震がこなければ」の後悔、やるせなさ感、⑤未来への期待をもちたい希望、などの5連を知見している。地震でなくなった「家」の物理的な喪失感が、二次的に「生活」「仕事」の喪失、生き甲斐の喪失へと派生していくことを知見している。

筆者は郷里を被災地(地震・津波・原発事故)にもち、地震直後から支援にあたり、被災者と会い支援し続けながら、彼らの語りから日本における初めての原発事故を伴う複合震災の被災者の心理に耳を傾けてきた。従来の知見では天災である大震災(地震)のみの知見がなされてきたが、本稿では天災と人災のもつ複合被災者という未曾有の被災者への支援を続けながら、研究者の視点から分析し、グローバルには被災者支援からみえてくる日本人の精神構造の考察をめざし、質的研究法を用いてより客観的に統合した知見を探り、今後の被災者支援への方向づけを試みることにした。

「方法」

被災者支援は、一個人につき数度にわたった場合が多かったが、関わった被災者は20名になっていた。支援は①電話での安否・避難場所確認の中継の電話連絡支援、②金銭的援助、日用品の援助、衣服類の援助、食料の支援と心理支援、③自宅へ招き宿泊を兼ねた支援、④避難先への訪問支援、⑤定期的な電話やメールでの心理相談支援、⑥会食お誘いでの心理支援、⑦文化施設、観光地散策支援、など多岐にわたり、

精神的な状況に応じ、数え切れないほど接してきた。

この被災者支援での語りを通して、シーケンス分析(質的研究法)で分析する。

「結果」

キーパーソンとなる被災者10名の語りを総合して、四期に区分し、シーケンス分析を試みた。

「I」 震災直後から避難先まで：恐怖感、驚異感、困惑感、喪失感の繰り返しで心が真っ白な時期：「時が止まった」感：「無我夢中期の夢遊状態」

第一連：生まれて初めての突然の長くて大きな地震

壁が裂ける音、柱に亀裂、屋根瓦が落ちる雷のような音、家財道具が走り回り襲ってくる音と恐怖、戸棚や壁掛けが壊れ落下、食器類のぶつかりあい壊れる音、ガラスが砕ける音、這ってなんとか外に出ると地面が割れる、道が寸断、陥没、橋が壊れ落ちる、地面が波打っている。恐怖が突然に襲ってきたがリアルそのもので、自分の身を守ることだけで必死であった。家のなかは散乱。多くの家で電気が止まり水道も止まった。怖い、長い、波乗りするような地震であった。多くの家で全壊は免れたものの片付け、大幅な修理が必要。

第二連：津波警報と避難勧告に半信半疑で右往左往：津波の破壊感への衝撃

消防隊員が、車で巡回し「津波が来ているから直ちに避難」を叫んでいた。町長さんの家まで津波がきているということで、取るものもとらずあえずすぐさま内陸に進み車で避難所(中学校体育館やスポーツセンターなど)に入る。半数は津波が近くまで来ており、多くの家や神社、お寺、富岡駅周辺などが流された。逃げ遅れた

ひとや途中で戻ったひとが行方不明になった。半数のひとは高台に家があり津波避難勧告はなかった。無線では遠くに津波警報を知らせていたが、「ここはだいじょうぶだろう」と、少しの片付けに入った。避難所では顔見知りのひとが、来ていないひとを心配しながら、「驚いた、すごい地震だった」と沈痛に話していた。「七メートルの津波ってほんとだろうか」の半信半疑もあった。しかし地震がやや収まった時に、津波がきていて、駅や橋が流されてあとかたもなくなっていた。呆然と津波の衝撃を知る。

第三連：「念のため避難」信じ切っていた安全：日常だった原発

夕方になって「原発の件で念のため避難」の勧告が役場から出され、避難所にそのまま駐留することになった。夜はストーブが何個か出され、毛布もわずかに出されたが、多くは寒いので乗ってきた車のなかで寝た。毎年避難訓練をしていたので、その感覚で「明日の朝には帰れるだろう」と、原発の不安は全くなかった。津波の行方不明者に話が集中していた。原発3キロ以内の住民は、津波避難から原発避難となりそのまま夜を明かした。原発は全員が安全と信じていた。

夜には10キロ以内に「屋内待避」が防災無線で流れた。朝になって20キロ以内の即時避難となり、早朝から町のコバスに乗せられ、それぞれ集落毎の避難が始まった。「自家用車で行けるひとは車で」とのことで、20キロ圏内のひとは取るものもとらず、中通り方面へ移動（川内村、田村市、三春町、川俣町、船引町、など）。道路は大渋滞となった。

第四連：情報からの隔離（地震がきた時から、電気が止まりテレビは見えないなど）

連絡のとれない家族（仕事に出ていた、買い物に出かけていたなど）の安否もわからないまま、何が起こったかの概況も遮断され、インフ

ラも寸断されたなかで、余震が続く中避難所に向かい、大渋滞のなかにあった。「原発が危ないのではないか」という不安が急激に脳裏を支配した。避難訓練では他地域への即時移動は皆無だった。情報が全くなかった。車でラジオをつけると、「東北地方の地震・津波の報道」があり、ようやく大変なことが起こったことを知る。しかしガソリンは少なく、ラジオも時々しかつけれない。携帯電話が通じないので、家族の安否もわからない不安。

第五連：繋がっていなかった避難先

避難所は緊急だったゆえにか、用意されていた毛布も少なく、食べ物も少なかった。着の身着のまま避難から避難へと追い立てられてきた住民は、寒さと固い床と外にあるお手洗いと、身の凍る思いでいっぱいだった。東電の水素爆発が起これ、避難しないで地元に残っていた人々が慌てて避難して合流した。しかし避難所は満員で、車のなかで寝てみても時々暖房を入れても、眠れるものではなかった。爆発は凄まじい音で後ろにのけぞったほどの地響きがしたと表現していた。「帰れないな」「これからどうなるのだろう」という不安が現実になっていった。それでも3月13日ころからは地域の炊き出しがなされ、温かい味噌汁もできるようになり、避難生活になっていった。テレビも置かれ、「大変な惨劇、原発事故」を知るようになった。

「Ⅱ」 ショック期：3月12日から15日頃まで：

「今を生きながらえるだけで精一杯」避難生活の懸念と「何も無くなってしまった」感と落ち込み、「世話になってしか生きれない」立場に転じた被災者の実感

第一連：安否確認を東京経由（他地域経由）で：安堵感と次の課題

家族、親戚、友人の安否（仕事先での避難、学校からの避難など）がとれなかったが、離れ

て暮らしている親の安否、居場所がわからない。連絡の携帯が通じないなかで、東京などの友人や子どもを介して、それぞれの避難先を教えてください。しかし数多い避難民と避難先、役場まで避難（役場機能が難しい）の状況で、安否の不安が高まる。まんじりとしめない日々となる。それでも電話が使えるようになり、東京経由などでお互いの無事を確認。

第二連：つけ焼き場の避難先：

衣食住はかろうじてできたものの、栄養面の欠如（おむすび、カップヌードル）、衛生面（着替えができない、歯磨き、風呂などができない）、暖房面（灯油に限りがあり足りない、毛布二枚での夜は床上で寒さがガチガチ）、安全面（余震と原発事故が続く中での、更なる避難で渋滞）、ガソリンを売っていない、何ももってこれなかった身ぐるみ来た無念さ、通帳、クレジットカード、現金なし。助かったものの病気になる不安、身の危険。

第三連：見えない放射能の恐怖：日常の喪失：コミュニティの喪失：仕事の喪失、

原発事故の状況の報道に、大変な事態になっていることを知る。「もう帰れないのでは」「いつ帰れるかわからない」「家と土地はゴーストとなる」置き去りにしてきたもろもろにショックと衝撃。予期しなかった事態だけに夢のなかにいると思うが、これが現実だと気づくことばが出ない。人生上未曾有の落胆。行き場を無くした、人生を無くした悲泣感。

第四連：「お世話になって生きながらえます」止まったままの心：受け身になっていく心：社会の役にたてないばかりでなく、寝るところも食べ物も着替え品も世話になってしか生きれなくなった。「お世話になりありがとうございます」だけが言葉になる。自分で主体的に生きれなくなった無能感。希望がなくなった、日常が見えない、方向性が見えない、止まって

しまった心。帰れなくなってしまった「我が家」、
「帰れなくなってしまった地域」

「Ⅲ」「とにかくこうしよう：より安全を求め
創意脱出組と天意と受け入れ良い子順応組
への分離」3月16日頃から1ヶ月頃まで：
転々とした避難先（4回から10回）

第一連：収束のめどがたたない原発処理：避難から避難へのジブシー生活。

長引きそうな報道に、より安全を求めて、他県への避難を試みる。息子夫婦のところへ、兄弟姉妹のところへ、身よりを頼って避難。郡山から都会に向かう道路は大渋滞。また身寄りでは無く公共の支援対策を頼って他県他市へ避難。地域の人の好意（衣類、日用品の差し入れ）、食料の差し入れ（スーパーの賞味期限すれすれ、コンビニ弁当など）、地域の支援（住居の提供：家賃なし、キッチンセット、テレビ、洗濯機、冷蔵庫などの使用）、地域の文化施設などの割引または無料の優遇、

第二連：被災者の身をつくづく知る：放射能と被災地から逃れたものの、最低限の生活。100円ショップで買いそろえる。もらいもの生活に味わう感謝と屈辱感の相反する気持ち「何も無いので助かるが、本来家はある、修理すれば住める、仕事もあったのに、なぜここで暮らさなければならないのか」「いつ帰れるのか」の葛藤。自らの責任でも天災でもなく余儀なくされた避難なのに、後手後手の対応への怒り。他県にきてつくづく見渡せば「かつての日常」が廻りにある。「自分たちだけが……」の無念さと屈辱感。被災地以外は日常であることの世界が違う、自分たちは失ったのだという実感。受け入れたくない、「まさか自分たちがなあ」の繰り返しのつぶやき。被災者以外にはわからないという寂しさ、あきらめ。

第三連：一度は福島県から飛び出したものの、

そこは自分たちが安心して住むには何も準備がなかった。世話になっている身には窮屈であり、生活の地盤がなかった。それでも都会でと、仕事探し、子どもの学校などを工面して、雇用促進住宅や市営住宅に住めるようになっていくと、一安心した。それまでが転々と流浪している。しかし中には一家そろって福島県に戻り、移転した役場の機能する地域に戻っていった。子どもの高校、まだ仕事がある、などの理由。同じ地域のひとといるのが安心だし、保障も確実だからという理由で福島県に戻っているひとも多い。行く先がないからと役場といっしょに県内を避難しつづけてきたひとたちも多い。住民のふたつの流れができていった。

第四連：震災一ヶ月後：事態が明らかになっていくなかで、自分が体験したことの心の整理、相対化が始まった時期：抑圧してきた危険性への気づき、葛藤とジレンマ期

何もかも失ってしまった。大切に守って育ててきた有機栽培の果樹園、放射能さえなかったら復活できたのに、もうだめだ。おれの人生の意味を無くしてしまった。生き甲斐も先祖代々の土地も、亡くしてしまった。有機栽培に二十年費やし軌道にのっていた果樹園。一瞬にしてみんな徒労と化した。熊川地区は津波で無くなってしまった。海水浴をした、お寺に参っていた、友達もいた、が全部跡形も無く流されてしまった。道路も地面も寸断、倒壊を受け、張り裂けた地面が惨い。あまりにも過酷で涙すらも出ない。何度も「何もかも無くしてしまった」無念さ、絶望のなかにいた。(喪失感の質の把握)

第五連：「簡単に金が入るなんてあり得ないのだ」自分たちにも責任がある。

東電には裏切られた思いで張り裂けそうであるが、それはあまりにも杜撰な対応しかしてこなかった危機管理だと実態がわかったからである。しかし落ち着いてきて考えると、地元民が

就職を得、税収を得、道路や文化センター、図書館などもできたのに乗じて、次々と設置を要望していくことになった流れは、自分たちの責任でもある。多額の税収が安易に得られたその因果応報とも思える。肥大化した地元民の税収への要望が、莫大な危険を内包していたのだとつくづく思う。(原因と因果関係の理解)

第六連：「他の地域のひとにはこの気持ちはわからない」自分もそうだった。チリ地震やチェルノブイリ原発事故のニュース、スマトラ沖津波を聞いても、実感なかった。今自分たちが当事者になったのだと痛感している。「わかってもらえない」この思いが悔しくもあり、「しかたがないもの」という諦観もある。(自分の境遇の客観化：相対化)

「Ⅳ」 震災から二ヶ月後：事態は理解し、境遇も限界も知りながら、今後のみとおしがたてられず、自己再建ができないともがく葛藤期は続くが、創意適応への努力期：また順応への努力期から再適応へ：新しい居住での問題も発生

第一連：自分の適応メカニズムのフィードバック、これでは鬱病になるという心の危険から一念発起：前向きに向き直る時期

「これは悪い夢なのだ。少し長い夢で、いつかすぐ日常に戻る」……否認

「何もかも失ってしまった。今までの人生なんだっただろう」何もする気がおこらない、食欲もない、横になってひねもすうつつと過ごす……うつ状態

「出かけると住まいがわからなくなる、迷子」「地域の顔見知り会った」という高齢者。どこにいるのかわからなくなっている、非日常に適応しにくい」……退行

「職なし、金なし、馴染みなし」の生活保護者と化した自分に屈辱感。「動きがめっきり減

りからだが退化していく」

かような自分に気づき、なんとか前向きにと思ひ起こす時期：

第二連：今の境遇でやれることを充実しよう：再建期、再適応期

新しい避難の一定期間暮らせるめどがたち、それなりに状況受け入れができるようになっていく。周辺の散歩、スポーツセンターでの運動、避難者向けの割引券や公共施設の活用など、被災者特典の活用を楽しむ。

第三連：少しずつ連絡がとれるようになる

兄弟姉妹の家族でさえ、避難先はばらばらであるが、「どこにいる」という連絡はできるようになった。転々とした避難が仮設住宅や公共の住宅であっても落ち着けるようになったからである。高齢者の死や葬儀（親族だけの小さな葬儀）に出かけたりできるようになった。しかし墓は無く、近くの寺に預かってもらう状況。ふるさとの墓にいつになったら入れられるかの無念さ。高齢者の死とその後の居場所（墓場）の不安

第四連：一年の行程に希望を持ちながら、無理かもの不安も。一時帰宅も始まり、変わり果てた家と地域に「なんでこんな防御服着て自分の家に帰らなければならないのか」「なんで一時間しかおれないのか」の無念さ、憤りなどを感じる。草が生えるので除草剤をまいたり、冷蔵庫の中身が飛び出し腐り、悪臭が家中に散漫していたり、さまざまな思いが去来。

第五連：仮払金、見舞金などが支給され、一時の生活の安心はできた。一時帰宅でもぎょうぎょうしいほどに東電側や役場側、専門家（放射能）などの世話に気分はほぐれたが、なんともやりきれない。「元に戻してほしい」「今頃になってよりも危機管理をもっと徹底してほしかった」、今更親切に対応されても、もう帰ってこない無念さ。安全と言われても「大丈夫か

な」の変だなの違和感をもっと明らかにし主張できる民意があったなら、こんな事故が起らなかったのではという悔恨。」

第六連：震災から三・四ヶ月後：自分の状況に応じた当座の自己再建の方向性が出てきた時期：デリケートとバリケードの心理

無意識に浮かんでくる日常だった断片と失ってしまった信頼感。避難して四ヶ月近くなると、それなりに落ち着き、今の生活でやっていける方向性が見えてくる。台所で、テレビをみながら、散歩中にふと、かつての何気ない会話や行動が浮かんでくる。「あんなことがあったな」「ああしていたんだな」と過去になりかかった日常の断片が浮かんでくる。心の中に日常があった！戦後日本人ががんばって高めてきた食の安全、技術力の信頼、世界からの評価が一変したことの遺憾さ。

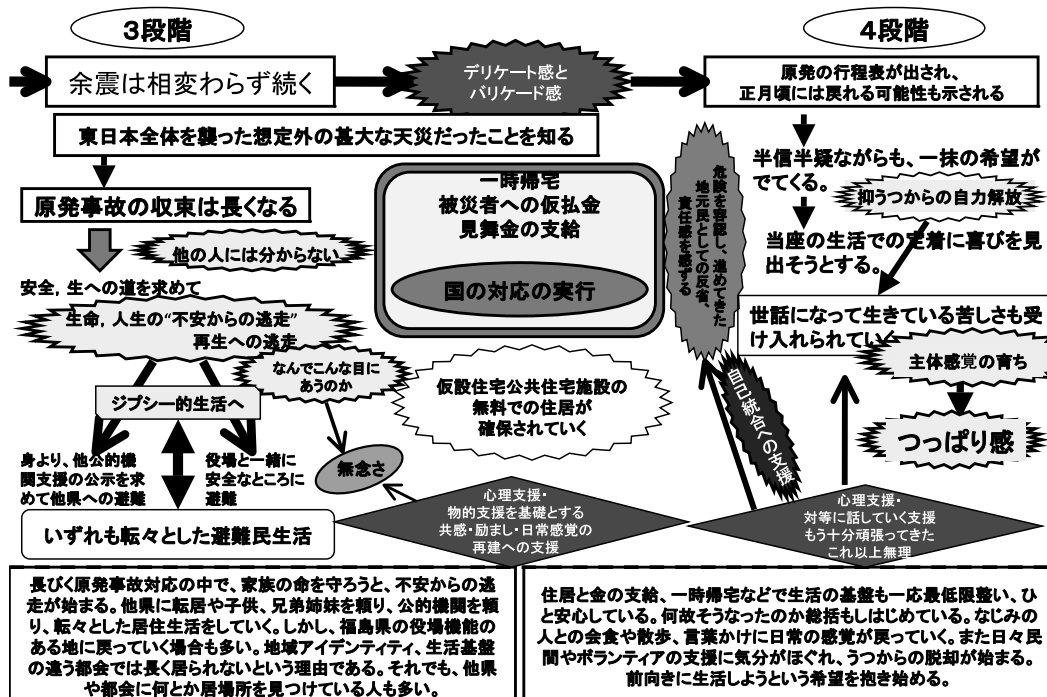
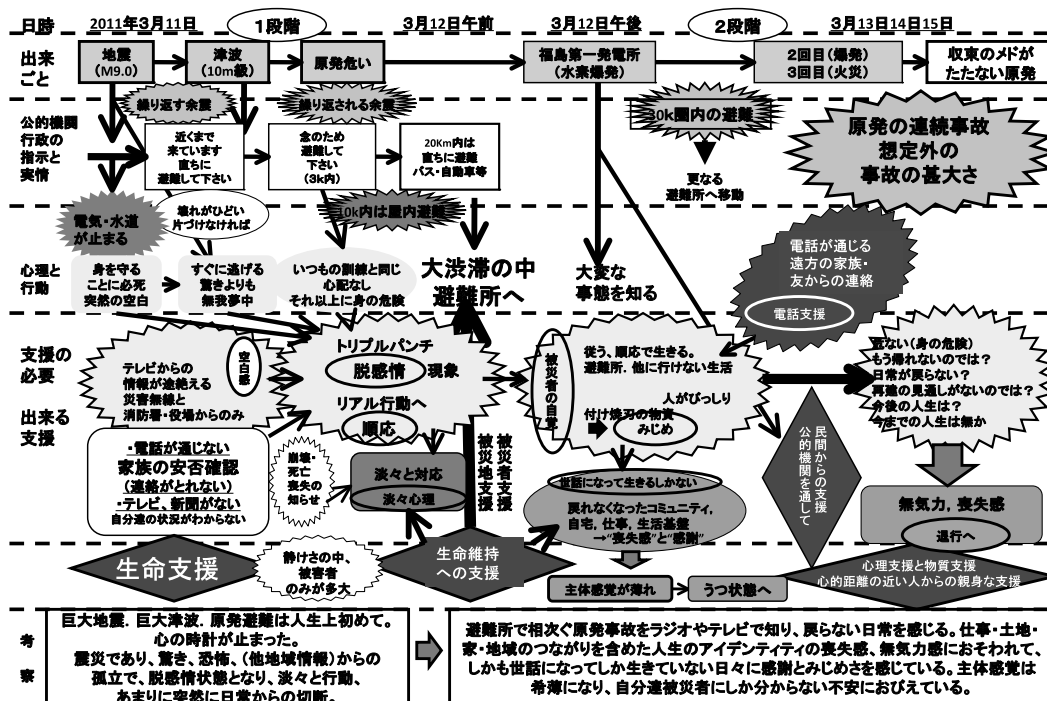
第七連：原因と概況を探る模索

「なんで自分がこんな目にあっているのか」振り返りと何がどうしてそうなっていったのかを思索。原発依存の心理を考察。自分なりの合理性を探し、自分の物語につむぐ。

揺れる依存と自立がある。行程通りに進んで家に帰って自活したい。正月がめどなら我慢ができる。という気持ちと、もしそれが「だめなら」、死ぬまで補助金を受け生活の保障をしてほしい。家も仕事も土地も戻ってこないなら。保障してほしい。「こんな生き方になってしまったのも天命だったのだと、受け入れようとしている」

第八連：デリケートとバリケード（抑うつ気分と突っ張り）感と主体感覚の賦活

震災から一ヶ月くらいの浮遊状態は消え、住居の保障で自信ができ、生活のめどもたってきて、本来のたくましさが蘇ってきている。生命力が主体感覚で芽生えだしている。つっぱりがでてきた回復がみられる。しかしひとりでは



としていると、また被災にあった悲しさが襲ってくる。それでも旧友やイベント、支援者との会話など他者と話すとき突っ張りが出てきて、元気になる。被災者呼ばわりはもういや！できるなら自宅のケアをしたい。除草剤をまくとか、腐敗物を片付けるとか、家の修理とか、お墓の手入れとか、できるだけことはしたい。対等な意識の芽生え、依存的、うつ的、被害者意識から脱皮しはじめる。「がんばろう東北」「がんばろう福島」も、もう要らない。これ以上奮起しなければならないのは重荷である。もうありのままでもそれなりに最低限は暮らせる。「元気でまた会いましょう」がふさわしい。

「全体考察と課題」

I 期からⅣ期までの語りから考察できることは、林（1996）の知見と同じような①死や負傷の危険、あるいは屈辱的な状況への遭遇、②恐怖心や無力感（なすすべがなかった）などを感じており、心的外傷体験に繋がっている。かけがえのない地域の喪失、家に戻れない喪失感などが大きなストレスにつながっているし、さらに避難から避難へと転々とした苦痛が大きなストレスになっている。また井原（2000）が示したように、被災体験によって、感情面の空洞化や無力感、エネルギーの少なさがⅠ期からⅡ期にわたってみられており、四ヶ月を経たⅣ期になっても、すべてが回復されたわけではない。さらに森、白川、鈴木（2000）らの心理療法過程に共通している心理過程を経ているが、統合された安定したイメージは、四ヶ月現在ではまだ十分とは言えない。地震、津波、原発避難という複合震災の傷跡は原発が収束し家への帰省が定まらない現在では、まだ難しい状況にある。井上・片山（1998）によれば、5ヶ月、6ヶ月になってから落ち着きを取り戻したとあるので、大人であっても4ヶ月ではまだ無理なのかもし

れない。また刈谷（2006）のように、語りの中の特徴として、「何もなくなった」「被災者でなければわからない」「世話になって生きている」「被災にさえあわなければ」という共通した心理が考察できる。

ここではこれらの先行研究も加えて、シーケンス分析した結果を統合し、エスノグラフィを作成し、その図から今後の課題を考察していくことにする。

「まとめと支援の意義」

今回の原発避難民の多くは、地震、津波の被害もさることながら、はるかに多く原発事故のため避難を余儀なくされ、長期化していることで不安や疲労を感じており、その点で従来の震災による心の痛手とはまた異なった特徴もっている。

- ① 家や土地の被災状況（地震・津波）の確認ができないところから、喪失体験の喪に服すところ（何度も出かけて確認）の癒やし（悲嘆作業）ができないことである。
- ② 家も土地もあり修理すればなんとか住めるのに避難しなければならないジレンマである。岩手地区や宮城地区の復興に向けた動きを知らながら、自分たちの町なのに立ち入り禁止で、できないいらだちや葛藤の心理である。
- ③ 原発事故の収束、そして放射能除染のメドが国や東電の政策実行任せのなかでの半信半疑な今後の見通しに寄せる不安の心理である。今後の人生設計の方向性がたてにくいアイデンティティの立て直しの延期の心理である。
- ④ 自分たちの町でありながら、自分たちではどうしようもできないほどに国や東電に依存・共生してしまったところからくる主体感覚のあいまいさである。

そしてこれらの心理的痛手のなかで、地域のコミュニティが分断され、ばらばらになってし

まった住民の心理である。最低限の生活の保障はされているが、お金で買えない古里を保存し守る自尊心を失ってしまった悲嘆である。

かような地域として自分の生計として自立したくてもできない宙ぶらりんな心理のなかで、とにかく今はつっぱり感がでてきて、精神的にはとりあえず安定する時が多くなったのが、筆者がこれまでかかわってきたひとたちへの支援効果であったとまとめることができる。しかも彼らが精神的に重篤な状態にならずにすんでいることが、筆者が支援してきた意義であったとも言える。

引用・参考文献：

- 井上幸子・萩野理恵・片山祐子・戸田みな子
1998 「阪神・淡路大震災」避難所における
集団遊戯療法の意義 心理臨床学研究 Vol
16-2 p162-173
- 井原茂男 2000 子ども達の目に映った神戸大
震災 阪神淡路大震災を体験した子ども達が
三年後に描いた（HTP）を分析する 大東
文化大学紀要 第38号
- 刈屋奈央 2006 S-HTP 法描画法における地
震体験が描画に与える影響についての研究
駒沢学園心理相談センター紀要 第2号 p
48-52
- 刈屋奈央 2006 S-HTP 法描画法における地
震体験が描画に与える影響についての研究
駒沢女子大学大学院修士論文 p 1-57
- 森茂起・白川敬子・鈴木顕子・利根川雅弘・戸
田みな子・宮本茂子・森地明子・久松陸典
2000 心理臨床学研究 Vol 18-5 p511-522
- 林春男 1996 心的ダメージのメカニズムとそ
の対応 「こころの科学」65 日本評論社
p 27-33

（付記：本研究は日本心理臨床学会倫理規定
及び綱領に沿って研究されたものであり、駒沢

学園研究倫理要項に沿って行っていることを報
告します。被災者がまた著者自身に最も近い存
在の方々であり、今後も支援を続けながら痛み
を共感し、自立支援していく所存です）